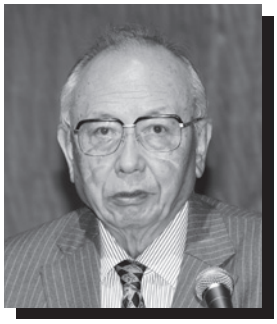

協賛機関挨拶

一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構　副所長

岡部　陽二

まずは、本年度の研究助成に応募され、めでたく採択された29名の研究者の方々にお祝い申し上げます。今年は競争倍率6.8倍という、昨年よりも一段厳しい競争状況の中で選ばれた方々で、本当におめでとうございました。

ファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成は、1992年に始められて以来今年でちょうど20回の記念すべき節目を迎えられたわけです。この20年間で累計助成件数は644件、助成金額は16億円に達しています。この助成を通じてこの分野での研究活動が活性化し、社会に裨益されたこの財団の大きなご貢献に、心から感謝申し上げたいと思います。

20年前にこの助成事業を開始されるにあたり、当時から既にバイオメディカルを中心とする臨床研究への助成はいくつか存在していたこともあって、医療・福祉問題を単に医学の研究の対象とするのではなく法律、経済、公共政策、倫理など広範な学問分野を総動員して解決する必要性があるというご判断から、この財団の目的をヘルスリサーチ研究に絞り込んで設立されたものと伺っております。

このように一貫した方針の選定規準の下で長期に亘って続けられている研究助成は、数少ない貴重な存在です。海外に比べて遅れているこの学際分野の研究を我が国に定着させるべきであるとの先見性のあるご発想に、満腔の敬意を表したいと思っております。

今年のフォーラムの基本テーマは「社会に定着しつつあるヘルスリサーチ」と設定されており、本日の研究発表の演題を拝見しても、医療社会格差や、色々な面からの国際比較、大震災との関連、地域社会との関わりといった観点から取り上げたテーマがたくさんあり、今年のテーマにあるように、この研究がまさに社会に定着しつつある実感を得ております。

皆様方もご存知の通り、ファイザー社は難しい経営環境下にありながらも、リストラを進める一方で、アニマルヘルス事業で高収益を上げるといった快挙を成し遂げられ、また、エスタブリッシュ医療部門を新設されてジェネリック薬への進出を図るといった新分野への挑戦や、積極的なＭ＆Ａ戦略で経済危機を乗り越えて、高い収益性を維持しておられます。ワイズ社との統合を機にロゴマークも一新され、昨年の売り上げは何と前年比36％増の678億ドルと、世界のトップ企業の座を確固たるものに固めておられます。日本法人も着実に業績を伸ばしておられると承知しております。

そのおかげをもちまして、ファイザーヘルスリサーチ振興財団のご尽力により、この研究助成とヘルスリサーチワークショップを引き続き行っていただけますのは、この分野の研究者にとって大変有り難いことです。

ところで、私が副所長を務めております医療経済研究機構と医療経済学会の共同編集で発行しております『医療経済研究』という雑誌がありますが、この雑誌も学会との共同編集を始めてから、質の高い学会誌として大変高い評価をいただいております。一昨年には初めて英文誌を発行し、年内には第2号を発行する計画です。

このファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成におかれても、高い研究の質を担保するという観点から、研究助成の条件として、研究成果は学会誌、学術誌等の専門誌に投稿することが明示されております。つきましては、ファイザーヘルスリサーチ振興財団で採択された研究プロジェクトの研究発表の場として、私どもの『医療経済研究』誌も是非活用いただきたく、お願い申し上げます。

また、当財団の助成とは規模が違って10分の1ほどのものではありますが、私ども医療経済研究機構でも、毎年、医療経済研究分野の若手研究者の方々に研究助成も行っております。この助成への応募も、お待ちしております。

冒頭に申し上げましたように、研究体制が立ち遅れていましたこの分野での研究振興に、つとに注目されたファイザーヘルスリサーチ振興財団の先見性に改めて敬意を表し、昨年この財団は公益財団法人に衣替えをされましたが、これを機にこのフォーラムがますます充実した存在感のある研究交流の場として力強く発展されることを期待して、私の挨拶に代えさせていただきます。

来賓挨拶

ファイザー株式会社　代表取締役社長

梅田　一郎

出捐企業であるファイザーを代表致しまして、一言ご挨拶申し上げます。

まず、本年助成を受けられた29名の先生方、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。そしてまた2年後、この会場で研究成果のご発表を聞けることを大変楽しみにしております。選考にあたりましては、大変ご多忙の中お時間を割いていただきました選考委員の先生方、そして選考委員長の永井先生、本当に有り難うございました。

さて、今年は3月11日に東日本大震災があり、その後、福島の原発事故という、未曾有の災害の年でありました。被災された皆様のご苦労は本当に言葉に表せないものがあると思います。私どもの会社でも福島県に約60名の社員がおり、私も震災後何度かその社員たちの所へ行っております。福島や郡山をお訪ねになった方々はご存知の通りですが、駅を降りると、さして変わる様子もないのですが、市内の大きな公園に行くと除染活動のためにロープが張られて、子供さんの姿もないというところを見ますと、今回の震災そして原発問題の大きさを痛感します。今回ご参加の皆様方あるいはそのご家族の方々にも被災された方がいらっしゃることと思います。心よりお見舞い申し上げます。

また、今回の震災では様々な医療・福祉の問題点も浮き彫りになっております。ヘルスリサーチの分野においても重要な課題が突きつけられているように感じられます。研究者の皆様方が様々な形で今後さらに復旧・復興に、ヘルスリサーチの観点からもご貢献していただけることを期待しております。

ファイザーヘルスリサーチ振興財団は、おかげさまで公益財団法人に移行してちょうど1年が経過しました。今回の公益認定は、財団が我が国のヘルスリサーチの振興に大きな役割を担ってきたことが高く評価されてのことであると考え、出捐企業としても大変名誉に思っております。

財団設立当初のことからのお話は岡部先生から十分にしていただきましたが、当初は、このヘルスリサーチという言葉の理解が、応募してくださる先生方もまだ十分でないところがあって、選考も大変苦労されたということも聞いております。しかし今年は「社会に定着しつつあるヘルスリサーチ」というテーマが掲げられるところまで来ているということであり、これもご指導いただいている先生方のおかげと、大変有り難く思っております。

財団事業の柱である研究助成も20年になり、これまでの総件数が644件、助成金の総額が16億円になっております。大変高い倍率の中から選ばれた研究の中には、本当に素晴らしいものがあると聞いております。今年の選考のご苦労や詳細に関しましては、この後、永井先生よりご紹介がいただけるものと思っております。

次に、私からファイザーの近況や会社を取り巻く環境について、少しご報告をさせていただきます。

ファイザーは世界の医療用医薬品市場において、現在もリーディング・カンパニーとしてのポジションを堅持しており、先ほど岡部先生からも高くご評価いただきましたが、実は内情的には大型品目の特許切れということもあって、苦労している部分もたくさんございます。特に、皆様もご存知のように、本社のある米国では9月にオバマ政権が財政赤字削減の一環として、10年間で3,200億ドルという非常に大きな医療費削減案を提案しております。米国だけではなく、イギリス、ドイツ等多くの先進国で医療費抑制策が次々検討され、実施もされているという状況です。世界的に経済が低迷する中、医療・医薬品を取り巻く環境も大変厳しいものがあると感じております。

先日の新聞に2010年の世界の企業の研究開発投資額のランキングが発表になっておりましたが、あらゆる産業を通じて研究開発投資額の世界トップ５の中で3社までが製薬企業で、ファイザーもこの中に入っておりました。これは、きわめてハイリスクな医薬品の研究開発に継続的に多額な投資をし続け、そのことを通じて医療の発展や患者さんの治療に役立っていくことにこの産業の宿命があるということですが、現在の大変厳しい市場環境を考えますと、現地法人の立場にあっても、舵取りの難しさというものをつくづく感じているところです。

日本国内の事業については、日本におけるメーカー･ランキングで何とかリーディング･ポジションを争うようなところまで参りました。新製品や適応追加など、毎年平均して7品目の承認を目指しております。医療現場で必要とされる医薬品を1つでも多く確実にお届けすることで、今後も日本の医療に貢献して参りたいと考えております。

弊社のビジョンで「日本で最も信頼され、最も価値あるヘルスケア企業になる」ということを掲げておりますが、このビジョンの実現のために、生命関連産業に相応しい社会貢献プログラムとして様々なことに取り組んでおります。今年は特に大震災を踏まえて、被災後半年ほどしたところで多くの方が発症されるというPTSD（Post-traumatic Stress Disorder）の疾患や治療に関する知識を、広く被災地の医療従事者の皆様方に提供するための講演会「東日本大震災心のケア支援プロジェクト」をスタートさせました。今年10回、来年50回、被災各地で開催し、3年間に亘って展開していくこととしました。

今後とも、この財団活動の支援を始め、様々なプログラムを通じて、継続的な社会貢献を実施していきたいと考えております。

さて、今年初め、財団発足時よりご指導いただいて参りました開原成允先生が突然他界されました。このフォーラムにおきましても、お一人お一人のご発表に丁寧にご質問・コメントされていたお姿を、昨日のことのように記憶しております。先生のご指導・ご貢献に改めて深く感謝の意を表したいと思います。

終わりになりましたが、本日助成を受けられた先生方とフォーラムに参加いただいた先生方のますますのご健勝とご発展を心より祈念して、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。